

---

# Animasyon

夜歌

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

Animasyon

### 【Nコード】

N1748K

### 【作者名】

夜歌

### 【あらすじ】

ただ普通に高校生活を送っていた未夜<sup>ミヤ</sup>。ある日見た夢をきっかけに、アニメの世界へと連れて行かれてしまった！

そこで宣告されたのは「これから始まる物語を現実世界で視聴率『0%』を取らせると、未夜の存在を消されてしまう」、「という絶望的なものだった。

ファンタジー作品でございます。

シリアスだったり、ギャグだったり色々…。

タイトルの読み方は「アニメーション」です。

## 序

漫画やアニメでよくある展開。

普通に平々凡々と暮らしていた主人公が、急に戦いに巻き込まれたり、異世界に飛ばされたり。そして、実は主人公には戦いの才能とかがあって、とかが。

よくある話。何回も読んだし、見てきた。

それでも面白いと思えるのは、その後の主人公や登場人物の行動に違いが出てくるからであって。

要は、最初がいくら似通っていようとその後のストーリー展開が大事なことだ。それによって読者、又は視聴者の反応は変わってくる。

と、頭の悪い私がちょっと頑張って持論を唱えてみました。何でわざわざそんなことするかって？

それは、私『天野未夜<sup>あまのみや</sup>』は、今まさにそのありふれた展開に巻き込まれているのです。しかも、巨大な死亡フラグつきで。

ああ……。私は元の世界に帰れるのかなあ？

誰かが…いる。

見えないけど、誰かが私の目の前にいる。

誰だろう…？

目を細めてみようとした時、それが私を指差した。

「…次は、貴方にしようかしら」

美しい女の声。しかし、その美しさが私の背筋を凍りつかせる。

私は怖気づいて一歩下がった。けれど。足元から何かが砕ける音。

一瞬にして私は下方に引つ張られる。落ちて、墮ちていく。

「い、いやあああーっ！」

頭に衝撃。

ああ…、頭に地面が当たったのかな。

…ん？それにしても痛くない。いや、待て待て。まず、落ちて頭を打ったんなら何でこんな風に考えられるのよ！

そう思い立ち、私は立ち上がった。

「…あれ？」

目の前には額に青筋が浮かぶ先生。顔は笑っているけど目は全く笑っていない。まさか…。

「おはようございます。天野さん。何か怖い夢でも見ましたか？」

先生の声は震えている。

「お、おはようございます！ よく分かりましたね。その通りです！」

すると、教室でどっと笑いがおきた。

「…そんなことくらいお前の様子を見れば猿でも分かるわあ！ これ以上は時間の無駄だから、放課後俺のところに来やがれ！」

さつきまでの穏便さはどこへやら。一気に柄の悪い野郎になった先生。ちなみに、このギャップに”萌え”を感じる人がいるとかいないとか。

「返事は!？」

「は、はい！ 行きますとも！」

先生の凄まじい剣幕に私はたじろいでしまった。先生は舌打ちをして教壇に戻った。舌打ちって…。

「さつさと席に着け！」

「はいい！」

私は立っていたことを思い出し、すぐに席を着いた。周りはまだクスクスと笑っている人がいる。うゝ、恥ずかしい！

「起立、礼」

授業が終わった瞬間、私は脱力した。

「こ、怖かった〜」

「その割には恐がっているようには見えなかったぞ？」

その声の主は私の隣に座っている奴だった。名前は『ヒノカリユウ日野火隆』。

赤みを帯びた黒髪に、赤みを含ませているような瞳。人間の遺伝子とはよく分らないものだ。

「先生も怖かったけど、夢の方が怖かったんだよ」

「夢？」

私がふくれながら火隆に答えると、今度は火隆の後ろの席の『カワミナセ黒川水瀬』君が話しかけてきた。

水瀬君は火隆とは対照的で、青みを帯びた黒髪に、青みを含ませているような瞳。

性格も対照的なんだけど、その珍しい色まで対照的となると狙っ

ているようにしか思えない。

「どんな夢を見たんだよ」

火隆が興味津々に私に目を向ける。こいつ、私を笑い話のネタにするからあんまり話したくないんだけど、まあいいか。

私は先程の夢の内容を肩をすくめながら話した。ふと、からかってくるであろう火隆の方を見ると、少し目を見開いているような気がした。

「火隆？」

私が名前を呼ぶと、ハツとしてこちらを向き、ニヤリと笑みを浮かべた。

「そりやまた変な夢を見たなあ、未夜は。ぷっ…それに落ちたときの叫び声を実際に出すなんて」

火隆は先程の授業の光景を思い出したのか、大いに笑い出した。

あー、気が済むまで笑いやがれ。

「…火隆。そろそろ笑いを抑えなよ。未夜さんに失礼だよ」

水瀬がそう注意したのは、火隆が笑いすぎて腹を痛めている時だった。水瀬君、もうちょっと早く注意するべきだったでは…？

この気持ちを訴えるようにして水瀬君をじっと見ると彼はニコリと笑顔を返してきた。

…腹の中では何を考えているのか分かんないような顔をしゃがんで。

あ、そうだと、水瀬君は何かを思い出したのか、鞆の中を探し始め、見つけたソレを私に見せた。私は一目見た瞬間にソレに飛びつく。

「これは…！」

「ん？ 何だそれ？」

火隆は私が手に持つ紙を見て聞いてきた。

「それ、未夜さんがこないだ好きだって言ってたアニメの記事。たまたまテレビ雑誌を読んでいたら見つけてたんだよ」

「本っ当にありがとう！ 水瀬君！」

私の声は水瀬君に対する感謝の気持ちで輝いていたが、視線は記事に釘付けのままだった。その様子の未夜を火隆は呆れながら見ていた。

「お前って本当にオタクだよな」

「し、失礼な！」

私は立ち上がって反論した。

「私なんてまだ序の口よ？ 私みたいな浅はかな2次元好きを真のオタクの方々と同列にするなんて、真のオタクの方々に失礼よ！」

私は腕を組んで熱弁をすると、火隆はさらに呆れた顔をし、水瀬君は苦笑していた。

「まあ、個人の意見だしね？」

「ここに本物のバカがいる…」

「何ですと！？ 火隆、ちょっと表に出やがれ！」

「ああ！？」

火隆はガラ悪く私の目の前に立ち上がる。だから、背が高くても無駄に威圧感があるんじゃない！横では水瀬君が私達二人をなだめようとしていた。

いつもこんな感じ。すぐに熱くなる私と火降。そして、常に冷静な水瀬君。こんな三人の構図が出来上がったのはたった二週間前の話。

月は未だに五月。季節外れの転入生。そして、不思議な、髪と瞳の色。一目見ただけでクラス的全員が二人に釘付けになった。

しかし、クラスは騒がなかった。別に、騒ぐなど注意されたわけではなく、ただ単に二人からとてつもない威圧感を感じとれたからだ。

青の彼は無表情、赤の彼は不機嫌。そんな様子の二人はどんなに鈍感な人でも感じ取れるほどの威圧感を発していた。もちろん、私も感じていた。

でも、私は気ままなもので、あんた達新しい友達を作ろうって気はないのかよー、一匹狼気取りですかー？、とかちよつと考えていた。だって、赤の彼なんてとてつもなく目付き悪いし。

運悪く、二人は私の隣とその後ろ。ええ、知っていましたよ、そうなると思っていましたとも。昨日まで私の隣のスペースは何もないから私物を置いていたのに、朝来てみたらビックリ。私物の置いてあった場所には机と椅子のセットが。そして、私物は私の机の上に。その要因が転入生だって知ったとき、あんたらが来るから私物が置けないじゃないー！って的外れな怒りを彼らの机にぶつけたのは内緒の話。

二人が近づいてくる。その無駄に伸びた身長も異常な威圧感の要因の一つになってるんだよー、とか思ってたじつと見たら睨まれました。それも二人に。普通に恐いから。

二人とも席についた。私の隣になったのは赤の彼。ま、お隣さん

だし話せるようにしとかなきゃ。

「えーと、曰野君？私、天野未夜。よろし…」

「話しかけんじゃねーよ」

凄みを聞かせて言われた。頭のなかで何かが切れる音。

気付いた時には立ち上がって思ったことを全て言っていた。

「何よ！ただ挨拶しただけでしょ！？挨拶は礼儀の一つって習わなかった？隣の席になったんだから、少しは話せるようになるうとは思わないの？ましてや、あんたは転入生じゃない！何様のつもりよ！そしてその後ろの青いあんたも！あんた達、さつきから何で異常な威圧感振り撒いてんのよ。居心地悪いつたらありゃしない！あんたら新しい学校に来たんだから、友達を作ろうとか、恋人を作ろうとかそんなこと思わないの！？思えないんだったら、赤ちゃんから人生やり直しなさい！」

…言ってしまった。明らかに独りよがりな考えだ。だけど、言ってしまった。周りが唾然としているのが感じ取れる。ええい、こうなったら胸を張るんだ！

曰野君がゆつくりと立ち上がって私を睨む。

お、お、お、お、背が高くてとにかく怖い。でも、もう引き返せない。私も睨み返してやった。負けるもんかあ！

「くっ…あはははははっ！」

笑い声。全員の視線がその声の主へとそそがれる。その声の主とは、なんと黒川君だった。なかなか笑いがやまない彼。何が起きたんだ？

「くくくっ…。急に笑っちゃってごめんね」

どうやら先程の笑いは私に対してだったらしい。何故に？というか、失礼な。

「そうだね。天野さんの言う通り、せめてご近所さんだったら挨拶しなくちゃね」

黒川君は柔らかい笑顔で私に右手を差し出してきた。

「初めまして。黒川水瀬です。よろしく、天野未夜さん」

「よ、よろしく」

私は黒川君の手を取り、握手する。先程までの無表情はどこにいったんだ？

「ごめんね、これでもけっこう緊張していたんだ。俺、緊張すると無表情になる癖があつてさ。そして、こいつも」

黒川君は親指で日野君を指す。

「こいつは緊張すると目付きが悪くなるんだよ。ま、もともと目付き悪いけど」

「一言余計なんだよ」

黒川君の言葉に日野君が突っ込みをいれる。二人、仲良いんだ。

もしかして、緊張していたから威圧感を出していた、ということですか。無意識だろうと、意識してだろうと、いい迷惑には違いない…。

黒川君が話し始めたことで教室内の空気はやわらかくなった。ついでに二人がかもし出す雰囲気も。

二人はその後クラスになんだかんだいって溶け込んでいった。私とは最初に言葉を交わした相手だからか特に仲が良くなっていったんだ。

「失礼しましたー」

私は教科担当の部屋の扉を閉める。しつかりこつてりしほられました。高校生にもなつて、眠くなる授業をする方が悪い、なんてことは思わないけど、やっぱり眠いんだよな。

外は暗くなり始めていた。何故か背中に悪寒が走る。  
夢のせいかな？

私は鞆を持って早く学校の外に出ることにした。

昇降口から出ると、校門の所に背の高い二つの人影に気付いた。  
あのシルエツトは明らかに水瀬君と火隆だ。

…あれ？いつもと髪の色が違うような…。

「未夜さん？」

水瀬君の声に、私はハツとした。二人が私に気付いてこちらを見ていた。

「今から帰り？」

「う、うん」

じゃあ、途中まで一緒に帰ろう、と水瀬君が言い、私達は三人並んで帰路につくことになった。そして、水瀬君と火隆が話し出す。

もう一回二人の髪をよく見たが、いつもと変わらぬ不思議な色。

光の当たり具合とかで違うように見えたのかな？

そんなことを考えていると、火隆が私のことを見た。

「なにジロジロ見てんだよ」

「痛っ、叩かなくなつていいじゃん！」

火隆は私がジロジロ見ていたのが気にくわなかつたのか、私の頭を叩いてきた。気にくわないのは分かるけど、暴力で訴えるな！

「それより未夜さん。今の俺達がしていた話聞いてた？」

水瀬君は今にも言い合いを始めそうな私たちの間に入ってきて、話を交えた。でも、私は二人の話など聞いてるわけもなく。

「えっと…ごめん、全然聞いてなかった」

水瀬君は、やっぱりとても言いたげな顔をしている。うう…、だって他のことを考えてたんだもん。

「あのね、最近各地でおかしな行方不明者が増えてるよね、て話をしていたんだ」

私はその話に記憶があつた。確か急に人が消えちゃうっていう事件だ。目の前にいたはずなのに、次の瞬間にはもういない。例え、それが密室であつたとしても同様。何故か隠しカメラ等は故障しているのだとか。現在の行方不明者は10人を越えたんだっけ。警察は一連の事件を同一犯による組織的犯行だと推測して捜査しているらしい。

「けど、それがどうしたの？」

私は水瀬君に聞き返す。その事件はいまや赤子以外の日本在住者なら誰もが知っているに違いない。

「いや、ただ単に危ないねって。未夜さんも俺達も気を付けなきゃ」

「あー、私達くらいの子達が男女問わずいなくなってるからねー」  
行方不明者達の共通項が年齢しか無いから捜査が難航している、とも聞いたな。

ふと火隆を見ると、眉をひそめて、いつもより目付きを悪くしていた。ただでさえ恐いのにより恐くなってどーすんのよ。

「火隆、顔が怖い」

「ああ？うるせえよ」

火隆はそう言うと、遠くを見つめた。あれ？いつもはつつかかってくるのに、今は大人しい。なんか調子狂うな。

「そういえば未夜さんの叔父さんってアニメ会社の人なんだよね」

私は水瀬君の言葉に火隆に対する思考を停止した。

そうなんです！私のアニメ好きは明らかに叔父さんの影響。実際

の父より好きだったり…？でもなあー。

「そうなんだけど、最近叔父さんが作ったアニメが無いんだよね」  
「何でだよ」

意外にも火隆が話題にくいついてきた。

「今大きいプロジェクトをやってるから、他のに全く手がつけられないんだってさ。それに、そのプロジェクトが決まってからけつこう経つんだけど、なかなか発表されないんだよね。なんでも、主人公がなかなか決まらないんだとか」

「何だそりゃ」

火隆が訳が分からない、という顔をした。

「それを聞いた時、私も今の火隆みたいな反応した。だって、基本的にストーリーって主人公を中心とするじゃない？ だから、今作ってるのは意味がないじゃないか、て言ったのよ。そしたら、『意味の無いことなんて無いよ。脇役は主人公の歩く道筋の案内人だと俺は思うんだ。まあ、障害物もいるだろうけど。でも、案内人なくして主人公はまっすぐな道を進めるとは限らないだろう？ だから、脇役の道筋をまず決めるんだ。』て言ったんだよ。もう訳が分からない」

私が呆れた調子で言った。

「その叔父さんはストーリーに忠実な主人公を欲しがっているみたいだね」

水瀬君は皮肉気に言葉を発した。

「それにそのプロジェクトの主人公は制作者の意図を無視して動いているみてえだ」

火隆はどこか確信したような表情をしている。

「二人とも、どうしたの？」

私は二人の様子に不信感を抱いた。

「未夜さん」

水瀬君が私の肩を掴む。

「なるべく早くその叔父さんとやらに俺達を会わせてくれねえか？」

もう片方の肩を火隆が掴む。

二人は真剣な顔で私の顔を見た。

逃げられない…。

「は…はい。叔父さん、忙しいみたいだからいつになるか分からないけど…」

「なるべく早く」

二人が同時に言う。そんなに早くアニメーターに会いたいのか？二人ともいつの間になんなアニメっ子に…。

「別にアニメ好きになつた訳じゃねーぞ」

火隆が私の思考を読み取ったのか、そう答えた。

「勝手に私の思考を読むな！」

「お前が考えていることを顔に出しやすからだろうが」

私は恥ずかしさと自分の愚かさで顔が赤くなるのを感じた。

「っ…分かった！ 叔父さんにはなるべく早くって念を押しときます！」

私の答えを聞くと、二人は満足した表情を浮かべた。そして、肩から手を離し、スタスタと歩き始めてしまった。

「ちょ…待ってよ！」

置いていかれそうになつた私は二人を追う。

二人を追いながら思った。何で二人は叔父さんのことが気になるんだろう？アニメ好きと言うわけでもないのに。分からないや。

朝。

朝が来た。

なんとか昨夜叔父さんにいつ会えるか聞いてみたら、今日の放課後に会えるんだそう。あんなに忙しい忙しい言っていたのに…。

関係はないけれども、私は朝起きたらまず窓のカーテンを開ける。今日もいつも通り勢いよくカーテンを開けた。すると、目の前には真っ青な青空が……無かった。

代わりにどんよりとした重たい雲が空を覆っていた。

「なんと言うか……いつもの事なんだけど、不吉だな……」

私は窓を背に、学校の支度を始めた。

朝食を食べ、家を出た。すると。

「にゃー」

目の前には黒猫がこちらを凝視している。

「カアツ、カア」

頭上にはカラスの群れ。

わ、私、何かしたっけ？動物に危害を加えるようなことしてないよ！？あ、昨日よく家にいる黒くてカサカサ動くのを退治したっけ……。でも、この子達とは関係ないよね！？まさか、黒いから仲間だったとか！？彼、人脈広すぎよ……。

私はとにかくアホな思考を一旦中断して、学校に行こうと一歩足を進めた。が。

次の瞬間、私の目の前は地面だった。膝が痛い。私は転んだんだ。

「……もおー！ 今日は何なのよ！」

叫んでみたけど、返事などある訳もなく。

……今日、絶対何かある。

「おはよー」

「おはよう、未夜さん。…て、どうしたの？ 膝の傷」

「ん、転んだ」

あの後、たまたま待っていた絆創膏を膝に貼って学校に来た。転んだのは家の前だったけど、家で手当てる時間もなかったし。さすが水瀬君、気付くのが早い。

「そりやまた朝からご苦労なこつた。災難だなあ」

火隆がにやついた顔でこちらを見る。

はい、そうですよ！災難だよ！

「それより未夜さん。叔父さんは何て？」

「いつなら大丈夫だって言ってたんだ？」

二人が私のことを凝視する。ここまで気にするなんて、何か大切なことでもあるのかな？

「おい」

火隆が急かしてきた。

「急かすな！ 今日の放課後に会おうってさ。放課後になったら、叔父さんがここに迎えに来るって」

そう伝えると、二人は顔を輝かせた。

「本当か！？」

「う、うん」

「それは良かった！ 早ければ早いほど良いとは思っていたけど、こんなに早いなんて…」

二人は喜びを隠せないようだ。何が早ければ早いほどいいの？

「ただ、問題は…」

水瀬君がそう言うと二人の顔に影がさす。

「あのー、全く話が見えないんですけど」

「気にしないで」

「気にすんな」

ほぼ同時に即答されまじたり追求してやるうかと思っただけど、あまり触れてほしくなさそうだからやめた。

一時限目では見事に睡眠学習をし、ただ今移動教室のため、移動しています。

「さつきはよく爆睡していたね」

隣で笑うのはクラスの女友達。次の授業は体育なので、さすがにそこまでは彼ら二人とは一緒にいない。一応クラスの女の子達とも仲良いのよ！私。…誰に言っただか。

「私は眠気に忠実なの」

彼女は未だにクスクスと笑っていたが急に表情が固まった。私が視線の先を追うと…。

「何だ…あれ」

今、私がいる場所は下足箱の前の廊下。並んだ下足箱と下足箱の間に”何か”がいる。何だか分からない、でも、何かがいる。黒く、大きな物体が。”それ”は覗くような体勢を取り、下足箱にもたれかかった。が、その瞬間、下足箱がドミノ倒しのように倒れた。

廊下に広がる騒音。

女子の悲鳴。

一気にその場は異常な空間へと変わってしまった。

私は、動けなかった。床に手に持っていた物を全て落とし、ただ、直立していた。

何ダ、アレハ？

下足箱が倒れたことによって露になった躯。あまりにおぞましい。



思いに反して、”それ”は一步、また一步と確実に近づいてくる。そして、確実にわらっていた。

「キミヲ ケセバ ボクハ ツヨク ナレル ンダ。 キミハ キメラ レタ コ ダカラ ツヨク ナレル」

ブツブツと喋る化物。声を出したいのに、出せない。体がまた言うことを聞いてくれない。

「ダカラ サヨナ ラ」 化物は一瞬にして速度を上げた。狙うは”ワタシ”。

嫌だ、死にたくない！

咄嗟に目を閉じた。何も見たくなかった。

衝撃音。

でも、体は痛くない。

私は恐る恐る目を開ける。そこにいたのは。

「大丈夫？未夜さん」

「全く…いつもの威勢はどこに行きやがった」  
水瀬君と火隆だった。

二人は各々の片手で化物を止めていた。

「み、なせくん？…と、かりゆ、う？」  
声が自然と震えていた。

「俺ら以外の誰だつて言うんだよ」  
その声に安心したのか、私は柄にもなく涙をポロポロと流してしまった。

「おい、柄にもなく泣いてんじゃねえよ」

「う、うるさあいつ！」

涙を止めたいのに、止まらない。

「火隆、怖かったんだから仕方ないよ。全く。とにかく、こいつを消そう」

「おう」

それからは一瞬だった。目の前で何かが起こったのは判った。だけど、何も解らなかった。

目の前を赤と青で埋めつくされたと思ったら、次の瞬間にはもう何もなかった。

「えっ？」

涙はいつの間にか引っ込んでいた。

試しに二人の前に出て空を掴んでみる。何もない。

「何やってんだ？ お前」

「いや…何もなくなっただなーって。…と、あんたら何をやったの！？さっきの化物はいずこ！？」

今までポーツとしていたけど、ようやく頭がハッキリした。さっきまでの出来事は何だったんだよ！

興奮気味の私を水瀬君は、私の肩に手を置いて落ち着かせようとした。

「未夜さん、落ち着いて」

「で、でも…」

「いいから落ち着きやがれ」

火隆のいつもより低い声に私はビクついた。でも、そのおかげで冷静になったのも感じた。

「よし。…さて、どうするよ、水瀬」

「どうするもこうするも、予想通りであることに変わりはないね」  
二人は勝手に話を進めていたが、私には二人の声が聞こえなかった。

声が、するんだ。

あの時、夢で聞いた声がするんだ。

何か、言ってる。わからない。

急に頭に痛みが走る。痛い、いたい、イタイ。

水瀬君と火隆が私の名前を読んでいる気がした。

でも、私は、返事するでもなく、痛みを訴えるわけでもなく、た

だ、意識を手放すことしか出来なかった。

?・「きっかけ」 4 (後書き)

はじめまして。

夜歌と申します(――)

本来なら”序”の時に挨拶をするはずだったのですが、書き忘れたまま投稿してしまいました…(笑)

さてさて。

”Animasyon”の?はいかがだったでしょうか?

ようやく話を進展出来ました。

これからもどんだん話を発展させていこうと思っているので、これからも読んで下さると嬉しいですよ。

では、今回はこのくらいで。

A u r r e v o i r

「あら、ようやくきたのね」

そう呟く女の声は美しいが、冷たかった。

女は自室からバルコニーへと出た。バルコニーからは下に広がる樹海がよく見える。女は月明かりに照らされた樹海を見渡した。

また、退屈しのぎが出来る。女はそう思うと、頬がゆるみ、全身に鳥肌がたつのを感じた。

「ふふふつ。今度は、どんな物語を紡いでくれるのかしら？」

女の声は相変わらず冷たいが、期待が入り雑じったような声のようにも感じ取れた。

女の微かな喜びに気付いたように、樹海もざわつく。

「さて、情報収集をしなくては」

女は>影くを、これから物語を紡ぐ『主人公』の元へと走らせた。

誰かが私を呼んでいる。

女の声じゃない、男の声だ。この声は知っている。

声があることを認識すると、次に風が頬を撫でるのを感じた。優しく、包み込むような。

ゆっくりと目を開けると、そこには草。

「え？」

勢いよく起き上がる。私は草の上に眠っていた。

えーと。よく思い出せ。頭を整理するんだ。

私はさっきまで学校にいた。そこに化物が出てきて、逃げ回っていたら水瀬君と火隆に助けられたんだ。そして、頭が痛くなって気を失った。

うん、覚えてる。けれど、何でここにいるのかっていう理由にはなりえない。

今いる場所は林に面した草原。私は木陰の下にいた。良いところ、良いところなんだけど。

「なんだこりゃ」

驚きを通り越して、私は呆れを感じてしまった。

「おい、お前はいつまで俺達をシカトすりゃあ気がすむんだ」

私は声がした方向へすぐに顔を向けた。

でも、そこにいたのは…。

「…誰？」

私の言葉に声の主は思いつきり顔をしかめた。

「はぁ？ テメエ、こないだまで一緒にいた野郎のことをもう忘れ

ちまったのか？」

「まあまあ、俺達がこんなんじゃしかたないだろ」

このやり取りは火隆と水瀬君のものに似ている。でも、目の前にいる二人はいつもの二人ではなかった。

火隆と思われる人物は、派手な赤とオレンジの入り雑じった髪に深紅の鋭い瞳。そして、どこか少年さを帯びている。

水瀬君と思われる人物は、落ち着いた群青の髪にスカイブルーの瞳。こちらは大人びた顔立ち。

やっぱりこの対照性を持っているのは。

「火隆と水瀬君か……」

私はため息を吐く。何で二人はいつの間にもグレちゃったのー？

「おはよう、ミヤさん。分かりづらいかもしれないけど、俺はミナセでこいつはカリユウだよ」

水瀬君が私に申し訳なさそうに謝る。

「ミヤさん。何で俺達がこの格好かというとね、これが俺達の本当の姿なんだ。別にグレた訳じゃないよ」

はい？

水瀬君が私の思考を読み取ったように言った。

「いつもミヤさんが見ていた姿は仮の姿で、これが本当の姿。俺達の世界に戻れたからこの姿に戻れたんだ」

ん、んんんん？

「それでね、ミヤさん。この世界についてだけど」

「スットーップ！」

私は水瀬君の口を止めた。

待て待て待て。話が急展開すぎる。私の小さい脳みそじゃ追い付けない。

「ミナセ、早く言い過ぎだ。ミヤが全然ついてこれていない」

火隆、ごもつともです。

「まず、ミヤに質問させてやれ。ミヤ、質問しろ」

えーっと、質問したいことがたくさんありすぎてどれから聞けばいいのでしょうか？いや、でもまずは。

「ここ、どこ？」

私がいるところからは、どこを見ても自然、自然、自然。自然しかない。こんな場所、学校の近くにあるわけないし、ましてや二人が私を連れてすぐ来れるような場所ではない。

「ここは『（ベータ）世界』と俺たちは呼んでいる。ミヤさんが今までいた世界では『アニメの世界』と言うべきかな？」

水瀬君が答えた。

はい？What？

「えーっと、水瀬君」

「ん？」

「頭、大丈夫？」

水瀬君は私の問いかけに動作を一時停止した。しかし、すぐに笑顔に戻り。

「ミヤさんよりは悪くないから気にしないでいいよ  
す、すいませんでしたー！

背中から黒いオーラが見えるよお！

「はははははっ！ ミ、ミヤ、ナイス」

火隆は腹を抱えて大笑いし、私に親指をつきだした。

「カリユウ、黙りやがれ。ま、ミヤさんが今の説明で分かるわけないか」

微妙に私が侮辱されている気がするのはいのせいで？

「ここはね、今までミヤさんがいた場所じゃないんだ。ここはミヤさんで言えば、『異世界』。ミヤさん、君は異世界に連れてこられたんだ」

私は開いた口が塞がらなかった。言葉通りの私の顔はさぞかし間抜けに見えるだろう。

「えーっと、今の状況を物語のジャンルで言えば『異世界トリップもの』ってこと？」

「へ？ あ、ああそういうことか。うん、そうだね。そして、ミヤさんが主人公で俺達が脇役」

・・・。

見事に三点リーダーが続きました。

「はあああっ!？」

私は立ち上がって二人を見下ろした。

「な、な、何それ！ 私が主人公!? てか、知ってる？ 人生っていうのは常に自分が主人公 ってそうじゃなくて!」

頭を抱える私に火隆は立ち上がって、落ち着かせるように私の頭を撫でた。

「ミヤ、学校に来た黒い化物を覚えてるか？」

その言葉に私は身体を強ばらせた。先程までの焦りはどこへやら忘れるわけがない。おぞましく、恐ろしい、そしてまるで恐怖の象徴のような醜悪な化物。私を狙った最低な化物。

「あいつは、『この世界』に呼ばれた人間を襲う化物なんだ。名前は『クラッセ』。本来、この世界からは出られないはずなんだが、『時』が近づいた時。その時だけ奴らはミヤがいた世界である『世界』に行けるようになる」

「『時』って…?」

私は息を飲み込んだ。聞きたいような聞きたくないような、聞いてはいけないような気がしてたまらない。

「『時』とは、この世界に『主人公』<sup>ヒロシヤ</sup>を呼ぶ時のこと。ミヤ、お前は『主人公』に選ばれたんだ」

時、が止まるのを感じた。それは物理的な時ではなく、私、の時。

私は昔から漫画とかアニメが大好きで、小さい頃は物語の主人公

になりたいって考えたことはある。私だって夢見る少女だったもん。でも、今は主人公達の大変さも分かるくらいの頭になった。特にファンタジーとかの主人公達は、死を直面する恐ろしさを味わうんだ。いやが上にもあらゆる事件の渦中に投げ込まれる。

私はそれに気付いた時、恐ろしく感じたんだ。

恐ろしくて、怖じ気づいたんだ。

恐くて、怖くて。

そんな世界はないんだって安心したんだ。

「私が、『主人公』…なの？」

自然と声が震えている。幼い頃だったらこの状況を喜んだだろう。でも、今の私は幼い頃から年が経っていて、たくさんを知っていて、だから喜べないんだ。

「ああ、そうだ」

火隆が私を納得させるように、力強く言った。

私はふんぎりをつけるようにして俯いていた顔を勢いよく上げた。私の目の前にいた火隆は驚いていた。

「分かった。このベタな展開に付き合ってやるうじゃないの。どーせ、この世界にいる魔王を倒してほしい、とかそんなののために私が呼ばれたんじゃないの？」

私の連れ去られ方といい、二人の容姿の変化とか、ベタ過ぎる。もしこれからもベタな展開で進むんだったらこんな感じのが当たりだろう。

二人は少し目を見開いたがすぐに頬を緩ませた。

「さすが、ミヤさん。その通りだよ」

「漫画好きだったらお見通しって訳か…」

うっさいわ。

「てことは、あんた達はその『主人公』を連れてくる役だった、て訳か。もしかして、この後村の長老にご対面とかあったり？」

「ご明察、と二人は声を揃えて言った。

私は肩を落としたり。ベタ過ぎて何かを言う気力にもならない。

「だったら、サツサと行っっちゃって魔王さんを倒して元の世界に戻るか」

私はサツサと終わらせたいから、そう言った。でも、火隆と水瀬君の二人は顔を曇らせた。

「どうしたの？」

「ミヤさん。腕にリストバンドが着いているでしょう？」

私は水瀬君に指された自分の腕を見た。

本当だ。

着いている。赤いリストバンドが。表示みたいなのが内蔵されていて、今は横棒が二本並んでいる。いつの間にな…？

「ミヤ、ここはアニメの世界だって言っただろう？」

私は頷く。

「アニメとは本来『世界』で見るものだ。そのリストバンドに表示される数字は、これからミヤが作っていく物語の視聴率を出す」  
火隆の言っていることが分かるようで分からない。

「そして、ミヤさん。ここからは心して聞いてほしい」

水瀬君は真剣な瞳をしていた。私は自然と気を引きしめていた。

「ミヤさんがこれから紡ぎ出す物語が、もし『世界』で視聴率「0%」を取ってしまったら、ミヤさんは『世界』のみならず『世界』での存在を消されてしまうんだ」

水瀬君の言葉は妙にハッキリ聞こえて、すんなりと頭に入っていく。

「私は、殺されるってこと？」

「そういうことじゃねえよ。ま、殺されりゃあそれまでだが。存在自体を消されるんだよ。ミヤがいたこと、したこと何もかも。全部なくなるんだ。ミヤのことを覚えてるやつはいねえし、ミヤがしたことは他のやつがやったってことになってるんだよ」

火隆が淡々と答える。

何、それ。

視界がにじむ。こんなところで弱気になるなんて。まだ何もやっていないのに。

「…それが何よ。ただ私はサツサと元の世界に戻りたいの」

口から言葉が出てくる。自然に。勝手に。

「戻るために死に物狂いで足掻く。一生懸命な姿は見る者を惹き付けるはずだわ。だったら、それにならってやるうじゃないの」

私は意思のこもった瞳を二人に投げ掛けた。

私はもう逃げない。そう、決めたんだ。

「六種類？」

私はミナセ君に聞き返した。

「そう。この世界に存在する人は六種類の内、一種類の魔法の力を  
持つんだ」

ミナセ君は淡々と言葉を綴っていく。

私達三人は、『長老』の元へと歩き出していた。今、ミナセ君が  
話しているのはこの世界の成り立ち。

「この世界にいる存在はね、全員『火・水・草・風・光・闇』の六  
種類の属性のどれかにあてはまるんだ。見た目で分かんと思うけど、  
カリユウが火で俺が水」

確かに、見た目で二人はそんなところだろうな、て想像はしてい  
たけれども、ここまで分かりやすくする必要はないだろうに……。

「具体的に、それぞれの力にはどういう効果があるの？」

私の問に、ミナセ君は首をひねる。

「うーん。そうだなあ…、カリユウ」

呼ばれたカリユウはミナセ君の言いたいことを汲み取ったようで  
頷いた。

「ミヤ、俺の手を見る」

カリユウの言う通り、私はカリユウの掌を見た。すると。

ポンツ、という軽い音と共に掌の上に火の玉が現れた。まだ温度  
は高くないようで赤く、オレンジ色を帯びていた。

「「火」の属性を持つ者は基本的に火に関することなら操ることが  
できる」

「火に関すること？」

「そ。ま、こつという火の玉を操るとでも覚えとけ」

カリユウはそう言って手を閉じた。火の玉は跡形もなく、なくなる。

「すごく大雑把に言われた気がするの、は気のせいかしら…？」

「ミヤさん。今度はこっちを見て」

「ミナセ君の声には振り返る。」

「ミナセ君はどこから出したのか、水筒のようなものを取り出して、蓋を開けていた。」

「ミヤさん。よく見ていてね」

「ミナセ君の言葉とともに、水筒の中の水が彼の手に巻き付いていた。水はある程度の量になると空中に浮かび、球の形になった。」

「その球にミナセ君が一言何かを言った。すると、球はみるみるうちに形を変え、先程の水では考えられぬほどの大きさの龍へと変えた。水でできた龍の双眼が私を捕らえる。」

「刹那、龍は私に突進してきた。」

「っ…！」

「声が出ない。避けられない。」

「あと少しでぶつかる、となった時。パンツ！という音と共に龍は砕け散った。砕けた龍の水滴はそれぞれが集まっていくつか球を成し、それぞれが動物の形を成した。」

「猫、犬、兎、熊などの動物がミヤの周りを踊り回る。」

「うわぁ…かわいい！」

「私の喜んだ雰囲気を見、ミナセは指を鳴らし動物達を消した。」

「気に入ってくれたかな？ ミヤさん」

「ミナセ君、すごいね！ 何というか、リアルで可愛くて…とにかくすごかった！」

「目を輝かせて自身を誉める私にミナセは笑顔で、ありがとう、と言った。」

「やりすぎだ、バカ」

カリユウはミナセに対して悪態をついたが、ミナセは気付きながらも無視した。

「「水」の属性を持つ者は基本的に水に関することなら操れるんだ。今みたいに水の形を変えたり、水を使って攻撃したりね」

「水じゃなきゃダメなの？」

私に質問されたミナセ君はよく分からない、といった顔をした。

「えっとー、水以外の液体は操れないのかなあって思ってた。たとえば、海とか雨とか。あれって厳密に言えば水じゃないじゃん？」

我ながら細かいことを聞いているなあって思う。でも、気になるんだもん。

「液体なら何でも操れるよ。ただ、ゼリー状のとかみたいな流動体は無理だけど」

へえー、と私は感嘆の声を漏らす。すごいなあ。

「次に、「草」についてなんだけど、「草」はミヤさんの想像通り植物を操るんだ」

私の想像通りって……まあ想像していたけど。

「ただこの属性は難しくって、植物達を操るにはまず植物達と仲良くならなきゃいけないんだ」

「仲良く…?」

私はミナセ君の言葉に頭をかしげた。

「植物達は成長し、呼吸もしている。そして、植物達にはそれぞれ意思があるんだ。だから、「草」の属性の者は意思を持つ物を操らねばならないんだ。だから、「草」の属性の者が名をあげるのは並大抵なことじゃないんだよ」

場所によって植物達の趣向も変わってくるらしいしね、とミナセ君は付け足す。何というか、ハンデありすぎだろ。

今まで私は植物に意志があるかないかなんて考えたことがなかった。成長してるし、呼吸もしているけど、生きてるっていう実感が持てなくて。

そうか、植物にも意志がある、という考え方もあるんだ。

「次に、「風」の説明だけど…」

そこで、一陣の風が舞った。風に運ばれた葉がミナセ君の掌に落ちる。

「もちろん、風を操ることができただけど、何より風って何かを運ぶことが出来るだろう？だから、「風」の属性の者は場所から場所への移動を簡単に出来るんだ。そして、最後に「光」と「闇」。」  
ミナセ君が指を二本立てて私に向けた。

「この二種類も他のと同じ？」

私がミナセ君を見上げて質問すると、彼は少し困ったような顔をした。

「いや。ちよつとだけ違う」

それまでただ聞いていただけだったカリユウが急に口を開けた。

「「光」は勇者の象徴。「闇」は魔王の象徴。二つは相反する象徴を持ち、互いに影響しあい、互いに傷つけあう。どちらも他の属性に比べて数は少なく、「光」は異世界人、「闇」は魔王の使いがなることが多いと言われている。てえことは」

先程まで真剣な顔をしていたのに、一気に意地の悪い顔になった。ちよつとだけ、真剣だなあって感心したのに。

待てよ？「光」は勇者の象徴で異世界人がなりやすい？私は？私は何人だっけ？

「ミヤさんはこの世界では異世界人だから「光」の属性かもね」

ミナセ君が私の考えていたこと、いや考えたくないことを補助して説明した。

「御免被る」

私がキツパリと言う。

「何で？「光」って女子としては憧れるような気がするんだけど……」  
ミナセ君が分からない、とても言いたそうな顔をした。

「確かに、綺麗な感じだし、憧れないと言ったら嘘になるけど……」  
「嘘になるけど？」

「あんたらに指図されているようで嫌なの」

今まであまりにもベタな展開が続いている。それはまるで意図された道筋のような、自分の意思で動いていないような。これから紡ぎだす物語は私が描いていく物語なんでしょう？ だったら、私の意志で動いている実感がほしい。

「じゃあミヤは何がいいんだよ」

カリユウが私の顔を覗き込んで聞いてくる。

「「光」じゃなければ何でもいい」

「「光」だったら魔王を倒すのも簡単になるだろうに」

ミナセ君が溜息を吐きながら私に言った。ああ、そうだろうね。楽になるだろうね。でも、そんなのつまらないじゃん。どうせすぐに帰れないんだから、思いつきり自分の思うままに動きたいんだよ。私がそう答えると、二人はやれやれといった雰囲気になった。

「ミヤさんらしいというか何というか……」

「めんどくせえ」

二人の反応に私は目もくれず、前を歩いた。すると、目の前に村への入り口らしきものが見えてくる。

「あ。何か見えてきた」

私の言葉にミナセをカリユウはすぐに私の視線を追った。

「やっと着いたか」

「まあ、丁度いいタイミングだね」

あ。そういえば、「闇」について聞いてない。

「ねえ、「闇」はどんななの？」

「それは、また後でね」

「どうせ長老のところで話されるに決まっている」

え……。あんな長つたらしい話をまたされるの？

私があからさまに嫌な顔を見ると、ミナセ君がクスリと笑った。

「軽く説明したって言うからそんなに長引かないよ」

「さてと」

私達三人は門の前に着く。そして、二人が恭しく私の両の手をそれぞれが取る。

「ようこそ。我等が村『アンヴィレ』へ」

一歩。

私は初めて『世界』の村へと足を踏み入れた。

……………弐

一步。

踏み込んだ村はRPGとかでよくあるのどかな村だった。

小さな民家が建ち並び、木々は民家と民家の間を繋ぐように立っていた。各々の民家に住んでいるであろう子供達は道を騒ぎながら走り回っている。

「ここが、『アンヴィレ』……」

何というか、本当にのどかだ。

「この近くに『クオクシエン』っていう商業の町があるんだ。そこで旅の身支度を整えることにしよう。あと、ミヤさんの服もね」

私はミナセ君の言葉に首を傾げた。

「何で私の服なの？」

「ミヤ、お前その格好で動き回るとか言うんじゃねえぞ」

私の格好はと言うと、紺のブレザーに白いワイシャツと首につけた赤いリボン。そして、チエックのプリーツスカートだ。所謂、制服と呼ばれるもの。明らかに周りから浮いている。

「何よ、カリユウ達だって……」

と、言いかけて私は口を閉じた。

二人の格好は、今から冒険に行きます！といった感じになっていた。ついでに二人はそれぞれ黒いマントをはおっている。

「な……あんたらいつの間に……！」

二人の外見があまりにも変わりすぎていて、服装に全く気づかなかった。

「いつの間にも何も、ミヤさんが寝ている間に着替えたんだよ。」

「あんた達だけ着替えるなんてズルい！」

「ズルいつて…。ミヤ、ここはまがりなりにも俺たちの故郷なんぞぞ？ 故郷に異世界の一風変わった服を着て出歩けばどんな冷やかしを受けると思ってたんだ？」

あ…、そうか。私にとつては異世界に来たわけだけど、彼らにとつては帰郷になるわけだ。久しぶりの帰郷で変な格好なんて格好付かないもんね。

「分かった」

私はすぐすごと引き下がることにした。ミナセ君が私の引き下がった様子を見、やんわりと微笑む。

「まあとにかく、長老の元に向かおう…」

「待って」

ミナセ君の言葉を私は止めた。ミナセ君は眉をひそめる。

「今度は何？」

「わ、私、まだ長老さんのところに行きたくない」

「はあっ？」

ミナセ君とカリユウが同時に疑問の声を発した。

「何を言ってたんだ？お前」

「ミヤさん、長老は怖い人じゃないよ？」

別に長老さんが怖いかもしれないから行きたくないわけじゃない。ただ、何かいやな予感がするんだ。

「先に『クオクシエン』に行きたい。長老さんに会ったたら、しつかりこつちの世界の服を着てから会いたいもん」

咄嗟に思い付いた答えにカリユウは溜め息を吐いた。

「お前なあ、普通は異世界の服を着ているからこそ『勇者』<sup>シムンクウ</sup>って感じがするんだろうが」

「それは分かる。でも、それでも…」

自分の予感を信じたいの。何でだか分からない。でも、この予感は絶対の自信をはらんでいる。だからといって、それを言うことで彼らが私の言うとおりにしてくれらるとは限らない。あくまでも私の予感だもの。だから…。

私はミナセ君とカリユウの腕を鷲掴み、思い立った方向へと駆け出した。

「おい！ ミヤー！」

「ミヤさん!？」

二人は驚いているようだが、無理やり手をふりほどくような真似はしなかった。

「私…！ 他の人がしないようなことをしたいの！ だから、まず買い物に行きたいの！」

駆け出しながらそう言う私に二人は吹き出した。そして、急に腕が引つ張られ、よろけながらも私は立ち止まった。

「あははははっ！ 何で他の野郎がやっていないことがまず買い物に行くことなんだよっ！」

「…確かに、アニメではあまり見ないけど…」

カリユウは腹を抱えて大笑い、ミナセ君は頑張って笑いを堪えようとしているが肩が笑っていた。

ここで、ミナセ君が一度咳払い。

「まあ、そういうことならいいかな。属性がわかり次第、すぐに旅ができるように、まず買い出しにいこう」

「属性…？え、長老さんのところに行けば私の属性が分かるの？」

カリユウとミナセ君の二人は目を見開いた。

「いや、そのために長老に会いに行くんだろっが」

「ミヤさん、何のために長老に会いに行く気だったの？」

ミナセ君の問いに私は少し戸惑った。

「え、えーと、魔王退治の概要を聞いて、さあ行ってこい！みたいなことが言われるだけかと…」

私の答えに二人は、はあ、と溜め息を吐いた。

「そんなことだけのためなんだったら長老なんていらないよ」

「正直、この世界の説明なら俺たちだけでもできるし」

酷い言いよう…。長老っていう立場は村の中で一番偉いんじゃないかな  
かったっけ？

「じゃあ、長老さんはけっこうスゴい人なの？」

「……いや、そうでもないんじゃないか？」

「ただこの村で一番年くつてるだけの長老なわけだし」

「え、じゃあどうして長老さんは属性が分かるの？」

私は二人の答えに首を傾げた。だって、明らかにオカシイ。

「いや、長老が属性を見抜く訳じゃねえんだよ。この村にある宝、  
『水晶玉』で属性が判るんだよ」

「この村の宝だからね。使用には村長の許可と村の大人である数人の  
同意が必要ってわけ」

「へえ〜。じゃあ『水晶玉』がスゴいんだね」

ここで、ふと私は疑問に思った。

「この村以外にもその『水晶玉』はあるの？」

「…いや、ほとんどないんじゃないかな」

少しミナセ君の言葉が濁っているような気がした。

「それよりミヤ、結局お前はどこに行くんだ？」

「え？そりゃあくオクシエンに…」

「お前が行こうとしている方向はクオクシエンと逆だぞ」

カリユウが親指で自身の後ろを指した。

「お前はいつまでここで話しているつもりなんだ？話は歩きながら  
でも出来るだろうが」

た、確かにその通りだけど！

「何よ、カリユウ。早くクオクシエンに行きたいの？」

カリユウはため息を吐き、頭を掻いた。

「腹が減ったんだよ。もうすぐ昼飯時のはずだ」

カリユウの答えに私は嘔き出してしまった。

「くくくっ…了解、りょーかい。クオクシエンに行きますか、お昼  
ご飯を食べに」

私がクスクスと笑いながら答えると、カリユウはばつが悪そうに

顔をしかめた。

「じゃあ、先に二人で行ってきてよ。俺は長老のところに行つて『水晶玉』の許可を貰つてくるから。長老以外の大人も集めなきゃいけないからね」

ミナセ君はそう言い終わると、また後でね、と言つてどこかに走り去つていった。

残されたのは、私とカリユウ。

「カリユウ」

「何だよ」

「クオクシエンに連れて行つて」

カリユウは一息吐き、いかにも面倒くさいといった顔をした。

「ほら、行くぞ」

カリユウは私が向かおうとしていた方向とは逆の方に歩みを進めていった。

私はおとなしくカリユウの後ろについていったのだった。

少し歩いていると、土で作られた道だったのが舗装された道に変わった。

「道が綺麗になってる」

「そりゃそうだ。クオクシエンが近いんだよ」

あ、そうだとカリユウは言うと、どこからか自身が身にまとったのと同じ黒いマントを私に渡してきた。

「なにこれ」

「クオクシエンのなかではそれを着てる。その服装は目立つ」

あ、なるほど。これを着ていれば異世界人とバレないっていうことか。でも、私はここで一つ疑問に思った。どうせバレるんだったら、今バレても大丈夫なんじゃないの？

そう伝えると、カリユウは呆れた表情をした。

「あのなあ。クオクシエンは確かに小さい商人の街だがそれなりに危ない奴らもいるんだよ。異世界人だってバレたらすぐに売り飛ばされるぞ」

私はカリユウの言葉を聞いて体を固まらせた。

「え。マジで？」

「マジで」

カリユウが溜め息を吐きながら言う。表情とかからしてどうやら本当みたいだし……。

私は急いでカリユウから渡されたマントを羽織った。意味も分からない土地で売り飛ばされるなんてまっぴらごめんだもの。

「よし。ほら、行くぞ」

カリユウは私がすっかり来たのを見てそう言った。微妙に高度を上げていく坂にも動じずに足をどんとどんと速めていった。完全な坂

を上りきったときには私は既に息絶え絶えだった。

「だらしねえなあ」

「うる…さあいつ」

何とか虚勢を張るも、まるで意味なし。私ってこんなに体力なかつたんだ。

「おい、ミヤ。前を見る」

カリユウの言葉にすこし難色を示したものの、私は俯かせていた頭を上げて前を向いた。

「わあ…」

思わず声を漏らす。

目の前に広がる街は、先ほどまでののどかな風景から一変し、賑やかな街並みとなっていた。

街中を歩くと、商人たちはすれ違いざまに何人にも自分の店に寄るよう呼びかけ、広場のような場所では大道芸人が演舞をしていた。元の世界でもこんなに盛り上がった街はない。私はキョロキョロしながら街を歩いていった。

「ミヤ、迷子になるぞ」

カリユウの言葉にハツとし、少し前を歩いていたカリユウを追った。

「ねえ、どこでご飯を食べるの？」

「もう少し進んだところ。」

カリユウは宛てがあるらしく、スタスタと迷わずに歩いていく。というか、今思ったんだけどミナセ君って私たちがこれから行くお店のこと分かってるの？

「ね、ねえ、カリユウ！」

「なんだよ」

カリユウは私の方を向かず、声だけで返事をした。

「ミナセ君のこと待たなくていいの？今お昼時だから人がこった返してるし、ミナセ君どのお店か迷っちゃうんじゃない……」

「大丈夫だよ。あいつ自身、俺がどこに向かっているのか分かってるはずだ」

カリユウの答えに私は首を傾げた。何で分かるんだらう？だってさつきお店の場所について何も言っただけなのに。

「まさか、意志が通じ合ってるの？」

私のこの言葉にカリユウは、あからさまに嫌そうな顔をして私の方を向いた。

「誰があんな腹黒野郎と意志を通じ合わせるかつ。あのなあ、これから行く店は俺もミナセも互いに何回か行っている常連の店なんだよ。そこに行けばある程度の食い物はあるし、ミナセもすぐに気づくだろう」

へえ…二人が常連の店なんてあるんだ。

「二人でよく行ってたの？」

「んなわけあるかつ。たまたまそれぞれがよく行く店がかぶっただけだ。おい、ここだぞ」

カリユウが足を止めたので、私もそれにならう。

カリユウが指し示したお店は、煉瓦づくりでごごんまりとしたお店だった。

足を踏み入れてみると、中は薄暗く、中にいたお客さん達は声を潜めて話し、なんだか怪しい雰囲気をもったお店だった。それに、お酒や煙草の臭いが充満していて、少なくとも私と同じ年の子達が常連になっているとは思いがたかった。

「いらっしやい」

私が辺りを見回していると、カウンターの方から若い男の声があった。その男は茶色の髪を横に流し、明るい緑色の瞳をし、頬杖をつけてにこやかにこちらを向いていた。

「久しぶりのご来店だね、カリユウ。お前が来ない間にお店はこん

なに寂れちゃったよ」

「この店はもともと寂れてんだろおが、アル」

酷いなあ、とクスクス笑いながら会話をするアルと呼ばれる人と、めんどくさそうな顔をするカリユウ。茶髪の彼は私の方に視線をずらした。

「で、君は？」

「あ。初めまして。天野未夜と言います」

「アマノちゃんっていうの？」

「い、いえ。名前はミヤの方です」

アルさんは不思議そうな顔をした。

「珍しいね、名字と名前が逆なんだ」

彼の言葉に、今度は私が不思議そうな顔をしてしまった。

「逆…？」

「ミヤ、こつちでは名前、名字の順番なんだよ」

カリユウは私に補足説明をしてくれた。なるほど、アメリカとかと同じか。

アルさんは立ち上がり、私の前にやってきた。

「初めまして。俺はアルベルト・バツシって言うんだ。よろしくね、ミヤちゃん」

言い終わるとアルベルトさんは私に手をさしのべてきた。私はそれに答えて握手する。

「えーっと、アルベルトさん？」

「アルでいいよ」

「じゃあ、アルさ…」

「アル」

有無をいわせない笑顔で呼び捨てにするよう指示するアルさん。

正直、怖い。

「ア、アル。よろしく」

よくできました、とアルは私の頭をなでた。いや、私、子供扱いされている？

「おい、アル。サツサと案内しやがれ」

「なんだよ、カリユウ。どうせ場所は知ってたんだから、自分だけ先に行けばいいだろ？」

「そういうわけにもいかねえーんだよ」

アルを睨みつけるカリユウに、それを笑顔で受けるアル。えっと、どこに行くの？アルは一つ息を吐き、やれやれといった表情になった。

「案内するのはダルいからカリユウ、お前がミヤちゃんを連れて行って。」

「はあ？」

「俺はお前等の飯の準備をしなくちゃいけないからな」

アルはそう言うと、奥へと行ってしまった。

取り残された私達。店の中にいた客たちはこちらをチラチラ見て話している。居心地が悪いなあ…。カリユウはため息を吐くと、私の腕を掴んだ。

「おら、行くぞ」

カリユウが向かう先は店の奥。

「ちよっ…！ そっち行っていいの!？」

「いいんだよ」

私が焦っているの知らんぷりし、カリユウは店の奥へと続くカーテンの向こうへと入った。その中は、小さな空間でいくつかの扉があつて、カリユウは迷うことなく一つの扉に手をかけた。

ギ、ギギツと音を立てながら扉が開いていくと、扉の向こう側からは眩い光が入ってきた。

一変。

私は文字通り目を丸くした。

店の中に胡散臭い雰囲気など無かったかのように、扉の向こうにはとても綺麗なテラスがあつた。

色とりどりに咲いた花々。そして、ウッドデッキの上に置かれた、木でできたしつかりとしたテーブルと椅子。テーブルの上には雰囲気を壊さないように、ベージュのテーブルクロスがかけられていた。「な…なに、ここ……」

私が驚いているのに、カリユウは素知らぬふりをして一つの椅子に座った。

「なに突っ立ってんだよ、ミヤ。サッサと座ればいいだろうが」

「いや、……うん。座ります」

私はカリユウと向き合うような形になる椅子に座った。木でできているので座り心地に期待をしていなかったが、思った以上に座り心地が良かった。

私が座ったのを図ってか、アルが料理を持ってきた。

籠につままれたパンを中心に、私とカリユウのそれぞれの目の前に赤色を帯びたオレンジ色のスープと、ハンバーグみたいなものが置かれた。

「あの…これは…」

「ん？ うちの店一押しのレストランメニューだよ。ミヤちゃんにはちよつと量が多かったかな？」

「い…いや、そんなことないけど……」

改めて眺めると、スツゴク美味しそうだった。どの料理からも香ばしい匂いがし、よだれが垂れそうだった。それに、より料理をおいしく見せるためか、食器に描かれた装飾も立派なものだった。お値段はいくらなのかしら？

「金のことは気にするな」

食べていいのか分からなく、うろたえていた私にカリユウは声をかけた。

「そうだよ、ミヤちゃん。お金のことは気にしないで。俺の店は常連さんとその常連さんと一緒に来た人からは金を取らないっていう方針なんだ」

私はアルの言葉に目を丸くした。

「えっ！ そんなので経営成り立つの!？」

「普通のお客さんに対して、ちょくっと他の店がやらないような方法を取っているからね。常連さんと言っても少ないし、大した損害にはならないよ」

アルはいたずらっ子のような笑顔で私に話した。何をやっているのかちょっと気になったけれど、聞くのはやめておこう。

……壱式分

アルが出した料理は本当に美味しく、私はすぐにたいらげてしまった。美味しさの余韻に浸っていると、店へとつながる扉が勢いよく開いた。

「お。来たね」

アルの優しい雰囲気の声からして知り合いのようだが、アルがちょうど私のまん前にいたため誰が来たのか分からない。

「遅えよ。もう食い終わっちゃうたよ、ミヤもな」

「ああ、すまない。説得するのに少々手こずった」

その発せられた声で私は誰なのかに気づいた。

「ミナセ君？」

アルを少し手でどかし、彼の方を見た。ミナセ君は私の方を見ると、ニコリと笑顔を向けた。

「この料理は美味しかった？」

「う、うん」

ミナセ君は会話しながら私とカリユウの間の席に座った。そして、アルに何かを指示し、アルは扉の向こうへと消えていった。

「手こずったって何をだよ」

意気を落ち着かせたミナセ君にカリユウは身を乗り上げて聞いた。「何ですぐに連れてこないんだって怒られちゃった」

肩をすくめて話すミナセ君の言葉を聞くと、カリユウはぐるりとこちらを向き、睨みつけてきた。お前のせいだ、と言わんばかりの視線だった。私が悪いのは分かっていますよ！

「まあ、とにかく夕方くらいまでにはあっちに着くようにすればいいって事にしてきたから」

ミナセ君はそう言うと、小さく息を吐き、まだ残っていたパンにかじりついた。ほどなくしてアルがミナセ君用の料理を持ってきた。メニューは私たちと同じ。既にお腹がいっぱいなのに、匂いにつら

れてよだれが垂れそうだった。

ミナセ君は意外とお腹がすいていたようで、自分の前に置かれると同時にガツガツと料理をたいらげていった。そんなミナセ君を目の端に入れながら、アルは口を開いた。

「そういえば、このあとお前等はどうすんの？」

アルの問いにカリユウはめんどくさそうに頭をかいた。

「この後は、まずミヤの身支度と旅の準備を済ませてから長老んここに帰ってくる」

「ふーん。あのさ、さっきお前達が話しているの聞こえたんだけどさ、何で怒られる必要があるんだ？ ただの旅だろう？ ただの旅くらい今時の若者なら普通にやっているだろうが。それに”連れてくる”って何をだよ。」

アルの鋭い指摘に私達三人はピタリと動きが止まった。実は私自身が異世界人でこの世界の魔王を倒しにきた勇者なんだ、なんて口が裂けても言えない。アルなら信用出来るかな…、と私が口を開きかけたとき、ミナセ君が私より先に言葉を発していた。

「お前は、旅に出ないのか？ お前だって俺たちと同じ若者のはずだが？」

したり顔でそう告げたミナセ君を、アルはピクリと眉を震わせ、睨みつけた。

「俺はすっかりとした旅には出ていないが、食料調達そのほか諸々で他国に行つて調達してくるからね。常に旅をしているようなものさ。それより、話を反らすなよ。”何”を連れていくんだ？」

今度はアルがしたり顔になり、ミナセ君がピクリと眉を震わせた。無言で睨み合う二人。微妙な緊張感に耐えかねたのか、カリユウが大きなため息を吐いた。そして、私のことを指差して言った。

「はあー。こいつだよ、こいつ。」

カリユウの答えに、アルは予想通りだったのか、やっぱりといった表情をした。ミナセ君は、カリユウを、何故言った、と問いただしそうな勢いで睨みつけた。

「ふうーん。じゃあ、何でわざわざミヤちゃんを連れて行く必要があるんだ？」

「こいつ、長老に会いたくないってぬかしやがったんだよ。挙げ句の果てにはそのまま旅に出ようとしたもんだから、俺たちが止めて、ミナセは怒った長老をなだめにいって今に至るってわけだよ」

カリユウは根拠のない嘘を理路整然と話していった。これじゃあ私がまるで我が儘なガキみたいだけど、ここで真実を言うわけにもいかないのです、私は肯定するようになされた。

「なるほどねえ…。ま、そういうことなら分かったよ。下手に詮索してごめんな」

まだ微妙に納得できない様子があったが、アルはあっさりと引き下がった。

「それにしても、ミヤちゃん度胸あるねー。村から脱走まがいの旅に出ようとするなんて」

アルは感心したように私に言った。何故感心されているのか分からず首を傾げた。

「だってさ、何も言わずに村を出るなんて、亡命者になるようなものじゃん。いくら長老に会いたくないからってそこまでする子は初めてみたなー、どれだけ嫌いなのか？」

クツクツと可笑しそうに笑うアル。私はアルの言葉を飲み込むと、カツと顔が赤くなるのを感じた。そしてカリユウを睨みつけるとカリユウはそっぽを向いて素知らぬふりをしていた。

「ごちそうさま」

今まで食事をしていたミナセ君は手に持っていたフォークを力チヤリと置き、口の周りを布巾で拭っていた。

「さて、そろそろ行かないとね。アル、旨かった」

ミナセ君の礼にアルは、それは良かった、と言って笑顔をつくった。ミナセ君が立ち上がると同時に、カリユウも立ち上がって身支度を始めたので、私も急いでそれに倣った。ある程度身支度を整え、ミナセ君は扉に手をかけようとしたが、すぐにアルの方を向いた。

「アル、頼みがあるんだが」

「ん？ なんだい？」

「俺たちの旅に持って行く食材を、選んで長老の家を持ってきてくれないか？」

この言葉に、ミナセ君以外の三人は首を傾げた。

「何で俺がそんなめんどくさいことをしなくちゃいけないんだ？」

「俺達はこれから旅の支度をすませなきゃならないから、食べ物にまで気が回るとは思えない。それに、食に関して何が長持ちするか、何が旅にいいのかなんてほとんど分からない。だから、そのためのプロに任せようと思っただけさ」

アルは、ふう、と軽く息を吐いた。

「分かった分かった。やらせていただきますよ。ただし……」  
アルの瞳が不適に光った。

「しっかりこの世界を平和にすることを約束してほしいな」

今度こそ、私たちは本当に固まった。固まった私達に対してアルはニコリと微笑み、食料調達をするために部屋を出て行った。

残された三人。三人は視線を交わし、その内の男二人は大きくため息を吐いた。

「さて、行くか……」

その一言で三人は店を後にすることにした。

………  
巻

私たち三人はアルの店を出て行った後、まず始めに女物の洋服が売られているお店の前に着いた。

「ここでミヤさんの洋服を買いえばいいと思うよ」

「ふーん」

私は曖昧な返事を返した。何故なら、基本的に服装に関してあまり興味がないからだ。女子高生ともなると、周りの女友達たちは自分の身の回りについてよく気を使っていたが、私は全くそういうことをしなかった。オシャレとかにお金を使うくらいだったら他のことに使った方がいい、と心から思っていた。正直、今の状況において洋服を買う、ということに関してはあまり気が乗らないのだが、今回は自分の身を守るためにも仕方がない、と諦めた。ま、どうせお金を払ってくれるのは二人だからね。悪いけれど。

「それでね、ここで俺らは二手に分かれようと思うんだ、ミヤさんと俺達って分かれ方だね」

「……はい？」

私はミナセ君の言葉に耳を疑った。

「えっ……、てことは私一人でこの店に入って服を買ってこいって  
いうの？」

「うん。そうしてもらおうかなって。だってその方が時間の短縮になるし」

そ、そんなことしたら私自身が旅に合った服を選ばなきゃならぬじゃない！

「ちょ、ちょっと待ってよ！ 私、この世界の金銭感覚って全くないのよ？ それに、旅に合うような服なんて分からないし……」

私が困りながら反論すると、その様子に見かねたカリユウが私の背中を押して、店の中に入れようとしてきた。

「ちょっ……カリユウー！！」

「つべこべ言つてねーでサツサと入りやがれ。俺たちも用が済んでからまたここに来るからそれまでにいいの見つけとけ」

「ミヤさん。お金の換算が十進法なのはこつちも同じだから、とにかく桁が小さいのを選んでおけば外れはないよ。あと、旅に合う服だけど、動きやすいのだったら何でもいいんじゃないかな。まあ、そこはミヤさんの感性によるから俺たちには答えづらいかな」

そんな身勝手な！、と思ったが、二人が私を一人で行かせようとする姿勢は変わらなさそうなので、私は折れることにした。店の前で言い争っていても邪魔なだけだしね。

「分かった。じゃ、あんたらが来るのを待つ。言つとくけど、私は分からないことだらけなんだからね。変なのを選んでも責めないでよっ」

私は最後に二人に対して舌を出してやった。少しだけの対抗心。私は二人がどんな反応をしたか知る前に、とつと店の中に入ってしまった。

店の扉が開くと同時に鈴の音が店中に響き渡った。その音で店員さん達が私の方を向いて「いらっしやいませ、」と口々に言う。

店の中は華やかで、少し見渡せば若い女の子達がそれぞれ店員さんと会話していた。女の子達や店員さん達が着ている服は、日常的に使われるような簡易なドレスで、日々おしゃれに対して気を配っているのが遠目でもよく分かった。

それに比べて私はおしゃれに対して全く興味はないし、ましてや今は真つ黒のマントで身を包んでいる。それに、私の髪は日本人らしい真つ黒さを誇っているの、端から見たら私は黒い固まりだろう。私、こんな華やかな場所にいていいのかな……。

「何か、お探ですか？」

「へえ!？」

ポーンと扉の真ん前で突っ立っていた私に、一人の店員さんが話しかけてきた。突然聞かれたもので、私はつい声を裏返して返事をしてしまった。店員さんはクスリと笑って、私を手招きする。

「扉の前にはお洋服を見ることはできませんよ？」

優しい口調で言う店員さん。私は今更になつて人の出入りを妨げていたことに気づいた。急いで店員さんの方へと歩み寄った。

「す、すいません！ 扉の前で立ち尽くしてしまつて……」

「別に構いませんよ」

店員さんがやんわりと微笑む。店員さんの笑顔はとても優しく、私はつい見とれてしまった。この店員さんは他の店員さんに比べて少し年齢が高いように感じた。「そうですね。えっと、このお店に旅ができるような身軽な服はありますか？ というよりか、もしかして無いですか？」

私が高に最後言葉を付け足したかというと、私の今いる周りにある商品はみんなドレスだった。かわいらしい桃色だったり、フリルが付いていたり、明らかに旅には不向きな服ばかりだった。私が不安そうに店員さんを見ると、店員さんはふわりと微笑み、「ありますよ」と言つて、ある場所へと誘導してくれた。

「なあ、ミナセ」

カリユウの呼びかけに、ん？ と生返事をするミナセ。二人はある雑貨屋で旅に必要な物を探していた。

「お前、何ですつと女物の髪飾りを見てんだよ」

ミナセは雑貨屋に来るやいなや必要な物を選び始めたのだが、髪飾りがおいてある一角を見ると、足をぴたりと止めて商品を見入っていた。

「いや……、ミヤさんに罪滅ぼし出来ないかなつて思つてさ」

「はあ？」

「ミヤさんをこつちに連れてきてしまった責任の一端は俺たちにもあるだろつ？ だから、少しでも何かできないかつて」

「アホか、お前は」

「お前に言われたくない」

ムツとして言うミナセにカリユウは一つ息を大きく吐いた。

「ミナセ、そんなことしても罪滅ぼしになんかならねえよ。あいつはもうこっちに来ちまったんだ、もう取り返しはつかない」

カリユウの言葉にミナセは顔を曇らせた。

「それに、何よりミヤはそんなのもらっても喜ぶ奴じゃねえよ。逆に『そんなの選んでる暇があつたらサツサと戻ってこい！』って怒るに決まってるだろうが」

ミナセはミヤのそんな様子が容易に想像できたのか、クスリと笑った。

「それもそうだな」

髪飾りに背を向け、ミナセは言った。

「早くあの店に戻ってあげよう。やっぱり不安だろうしね」

言い切るやいなや、ミナセはテキパキと買い物を再開し、会計まで済ませてしまった。カリユウは会計を済ませたミナセを見、店の外へとでた。

「ミナセ、行くぞ」

「……ああ」

二人の声は少しの緊張をはらむ。二人はどこかに向かつて歩みを進めていった。

「んー、これも似合いそうねえ」

マリアさんは私と手に持った服を交互に見ながらそう言った。先ほど、店の中を移動しているとき、お互いに自己紹介したのだ。店員さんの名前は“マリアネラ・バツシ”と言って、マリアと呼ぶよと言われてしまったので“マリアさん”と呼ぶことにした。マリアさんは私のことをミヤちゃんと呼んだ。旅の同行者について、ミナセ君とカリユウについてウツカリ口にしてしまったのだが、マリアさんはミナセ君とカリユウのことを知っているようで、一気に打ち解けてしまった。

因みに、今はマリアさんがいろんな洋服を見て、私にどれが最も合うのか見定めてもらっている最中だ。もう軽く30分くらい経っただろうか？ さすがにただじつと直立させられるのに疲れてきた矢先に、マリアさんの顔がパアツと明るくなった。

「これよ！ これっ！ 着てみなさいっ！」

マリアさんはズイツと私の目の前に服一式を差し出してきた。

「えっ……？」

「たぶん、これがミヤちゃんにとって一番“相性がいい”はずよ！」マリアさんの言っていることはよく分からなかったが、とにかく言われるがままに試着してみることにした。

数分後、少し着るのは大変だっけれど、何とか着ることができた。

「ミヤちゃん、開けていいい？」

試着室のカーテンの向こう側からマリアさんが聞いてきた。

「あ。はい、どうぞ」

マリアさんは勢いよくカーテンを開けた。私が服を着た様子を見ると、ニツコリと微笑んだ。

「うん、やっぱりこれが一番馴染んでいるわ」

私は試着室を出、近くにあつた窓ガラスに向かってくると一回転して自身の服を見てみた。私が着ている服は、クリーム色の半袖Tシャツの上に、名前が分からないだけ薄い茶色の少し厚手で漢字の“凹”みたいな形の服を着、下にはベルトを付け、そんなに上と同じ茶色の短めスカートに黒いスパッツ。そして、膝丈より短いベージュ色のブーツだった。改めてみると、シンプルな服装だ。ブーツだと動きにくそうだな、とか思ったけれどそんなわけでもない。

「あの、マリアさん。“馴染んでいる”とか“相性がいい”ってどういう意味なんですか？」

私の質問に少しマリアさんは驚いたかのように目を見開いたが、すぐに笑顔に戻った。

「あ、そっか。ミヤちゃんは今回が初めての旅なのよね、それじゃあ知らなくても仕方がないわ」

「す、すいません」

「んーん、謝らないで。そうねえ、何て説明したらいいかしら。旅に着ていく洋服って、結局は自分の身を守る“装備”なのよ。普通に日常生活を過ごす場合は、特に洋服の材質に気を使う必要はないんだけど、旅の服となるとその装備がもつ防御力が生きていく上で大切になったりするの。だから、材質は自然と防御力の高い生物達から貰うことになる。ここまで、ついてこれてる？」

「は、はい！」

要はゲームとかでよくある　のローブ、とか、　のブーツ、とか伏せ字のところのモンスターの名前によって防御力が変わってくるってことだよな。

「“馴染む”とか“相性がいい”って言うのは……」

と、マリアさんが言い掛けたときだった。

ガッシャーンッ！

私のすぐ横にあった窓ガラスがド派手な音をたてて割れた。ガラスの破片から目をつむったと同時に、自身は何かを引き寄せられた。引力のように、否、力づくで。そして、気づいたときには私は誰だか知らない男に自身の首を腕で押さえられていた。

「っ……………」

「ミヤちゃん！」

店の中は悲鳴で包まれていた。

「女ども！　黙りやがれえ！」

凄みを効かせた重低音の声。一瞬ですべてが怯む。その声の持ち主は私を腕で押さえつけている張本人だった。



?・「世界」・6 (後書き)

今日は。今回はちょっと補足説明を入れるために後書きを書かせていただきました。

えっと、今回ミヤがマリアに洋服を選んでもらい、着用したシーンなのですが、ミヤの洋服の名前が分からない、というところに、ん？ と違和感を覚えた方がいらっしやるのではないのでしょうか？ えっと、ミヤが洋服の名前が分からない、と言っているのはミヤが洋服について関心を持っていない、ということでしょうかかさせていただきます。あまり詳しくないのに洋服の名前を多様するのはやはり変かな、と思ひまして…… (汗)

それでもやっぱ変！ と思う方はなんなりとお申し付けください。対処させていただきます。

てか、こういうのが後書きに書かなくても大丈夫な文章を書けるようになりたいものです ( - - ; )

長文失礼いたしました (汗)

「よし、これで全員集まったな」

男たちが襲撃した後、一時店の中は騒然とした。しかし、襲撃者達の中で一番偉そうな奴が脅して黙らせた、私を使って。そいつは店の中にいた人たちを一カ所に集まらせ、とにかく静かにするように、と指示をした。私はまだそいつに捕まったままで、マリヤさんを含めた他の皆はしゃがんでいるのに、私一人だけみんなを見下ろす形になっていた。

「おい、この店で一番偉い奴はだれだ」

「私でございます」

間髪入れずに答えたのは、マリヤさんだった。マリヤさんは立ち上がり、しっかりと私と男を見据えた。

「この店の売上と魔道具を全て俺の前に持って来い」

その言葉を予想していたのか、マリヤさんは軽く頭を下げると店の奥へと姿を消した。マリヤさんに続いて襲撃者の一人が店の奥へと消えた。おそらく監視役だろう。

場は緊張した雰囲気を帯びていた。空気が重い。ふと、私は一つの疑問が頭をよぎった。やつらの襲撃はとても派手なものだった、外の人間たちが気づかないはずもないほどの。それに、この店は人通りの少ない場所に立っているわけではなく、それなりな大通りに面している。気づかないはずがない。そう思い、私は割れた窓ガラスに視線を移し、外の様子を伺おうとした。しかし、

「あ、れ？」

驚いて、つい声を漏らしてしまった。場の空気が一気に張る。しかし、驚かざるを得なかった。窓は“元通り”になっていたの。元通り“割れていない状態”に戻っていたのだ。そして窓の向こうを歩く人々はこちらを見もしない。まるで、この店の異変に気づかないかのようだった。

「そんなに窓の向こうが不思議か？」

ボスの男が私の耳元に口を近づけて囁いた。

「え、ええ。不思議です」

とっさに出た私の声が震えていた。遂に口をきいてしまった私を、店員や客たちは哀れみの目を、強盗団達は嘲笑するような目で見ていた。

「俺が誰か知らないのか？」

知るかあ！ と吐き捨ててやりたいところだが、そんなことしたらどうなるかなどと猿でも分かる。しかし、だからと言って、こいつが誰なのかなんて分かるわけもない。私はまだこの世界に来てから数時間しか経っていないのだ。

「知りません」

キツパリとはっきりとした声で答える私。場の空気が一気に凍るのを感じた。そして、男が何か行動を移そうとしたが、しかし、私はそれよりも早く言葉を続ける。

「私、世間についてよく知らないんです。それに、私はあなたの顔を見ていません。声だけで人を覚えられるほど器用じゃないんです」  
後ろからの雰囲気がかたならぬものになっていたのには気づいていた。それなのに、意外と言葉はスラスラと出てくる。私って意外と肝が据わっているようだ。  
と、少し気を緩めた時だった。

グイと顎を掴まれ後ろを向かされる

目の前に映ったのは青年の整った顔立ち。ミナセ君より明るい、いやくすんだ青色の髪に金色の猫目。額から右目を通り頬をまで流れた傷痕は見た者を忘れさせないほどの存在感があった。

「俺の名前は『ライアス・アーヴィング』だ。強盗集団『アッサ』を率いるボスだ。ここらではちいとばかり有名なんだがなあ、この右目でなあ」

ライアスはニヤリと笑って傷痕を見せつける。そして、目を細め、私を見つめた。



子供だましも知らないなんてお前……」

「こ、子供だましだけで強盗なんかしちゃうんだ」

「ああ？」

ライアスは眉間に皺を寄せた。

「だって、そんな誰でも知っている子供だましだけで強盗するなんて、あんた実は弱いんじゃないの？」

すぐに、後悔した。自分でも何でこんなことを言ったのか分からない。まるで口が勝手に動いたかのようで。

気づいた時には私は床に伏していた。頬、と、腹が痛い。私の軽率な言葉に腹を立てたライアスは頬をはたき、そして腹を蹴ったのだ。

「おい、手え出さねえからってなめてんじゃねえぞ、ガキ」

恐ろしい形相で私を見下ろすライアス。さすが名の知れた強盗集団のボスというだけあって気迫が違った。ライアスは私の髪を掴んで私の顔を上げる。

「次、調子乗ったらこんなじゃすまさねえぞ」

そう言うと、ライアスは部下に私を抑えるように指示し、私は床に伏したままの格好で取り押さえられた。

「おい！ 金はまだなのか！」

気が立っているのか、ライアスは急かすようにして奥に行ったマリヤさん達に怒鳴った。

奥からは「少々お待ちを」という焦った男の声が聞こえてきた。

ライアスはイライラと店の中をうろろし始める。何かをぶつぶつ言うようにもなっていた。何をあんなに焦っているのだろうか。

「済みました」

店の奥からマリヤさんが姿を現した。

「ようやく、か」

ライアスがマリヤさんを睨み据える。

「おい、要はすんだんだ。サツサとずらかるぞ！」

「ちよっとお待ちなさい」

ライアス達がずらかろうとしたとき、マリアさんが呼びとめた。その場にいた全員が驚きの目でマリアさんを見つめた。

「あなた、確か『ライアス・アーヴィング』でしたっけ？ このあたりで有名になり始めた強盗集団のボス。あなた、強盗ばかりして何をするつもりなのですか？」

マリアさんの言っている言葉が理解できなかった。何のためにそんなことを聞いているのか、全く理解できない。

「なんでそんなことをあなたに話さなくちゃいけないんだよ」

ライアスがイライラした雰囲気で答える。何故か貧乏ゆすりをしていた。何か焦っているような。

「いえ、正直なところこれは興味ですわ。強盗になんてなって名を上げて、何が楽しいのかしらって」

「だから、あなたにそんなこと言う筋合いねーだろが！」

ライアスは言い放つと同時にマリアさんに掴みかあった。

「マリアさ……！」

しかし、次の瞬間、何故かライアスはマリアさんとは反対の壁に投げつけられていた。

「か、はっ……」

血を吐くライアス。何が起きたのか、私には分からなかった。

マリアさんの方を向くと、マリアさんの目の前にもう一人、人が立っていた。

「全く、人の母親に手を出そうとするなんてなんて野郎だ」

その人とは、茶色い髪に緑の瞳の青年。

「あ、アル……？」

「あれ、未夜ちゃん、この店に来てたんだ」

その青年は、先程まで一緒にいたアルだった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1748k/>

---

Animasyon

2011年1月29日00時25分発行